

話題開始者と受け手間以外の応答の発話の分析 —内的場面と接触場面における三者自由会話を対象に—

An analysis of responding utterances excluding those between the topic opener and receivers: In the case of the three-party conversations in internal and contact situations

大場 美和子 (広島女学院大学)
OHBA Miwako (Hiroshima Jogakuin University)

Abstract

The focus of this research is placed on the two types of responding utterances following a topic opening utterances in the three-party conversations among acquaintances in internal and contact situations. The two responding utterances are; one which is uttered by a non-receiver of the topic opening utterance, and the other one is uttered toward a non-topic opening participant and they are considered from the perspective of a role of the language host. The former is classified into four and the latter classified into three categories by the relationship of the topic opening utterance. As a result, though the amount of the two utterances is few as a whole, the rise of the number by a Japanese native speaker in the contact situations, especially low intermediate level, is found. The two utterances are considered as a language host adjustment by a Japanese native speaker to carry out exchanging information between native and non-native speakers of Japanese. However, in the three party conversations, the two utterances are found in both the internal and contact situations, the adjustment as a language host is acceptable for native speakers. The adjustment in the contact situations can be considered as a variation of adjustment in internal situations of the three party conversations among acquaintances to accomplish information exchange.

1. 研究の目的

三者会話では、二者会話のような2人の参加者間のみのやりとりとは異なる多様なやりとりが観察される。例えば、話題開始の発話とそれに継続する応答の発話のやりとりに着目すると、応答の発話を話題開始の発話の受け手ではなく、もう1人の参加者が行うこともある。また、応答の発話が、話題開始者ではなく、もう1人の参加者に向けられることもある。つまり、二者会話の場合は話題の開始者と受け手間のみのやりとりとなるが、三者会話の場合、話題の開始者とその発話の受け手の間のみでやりとりが行われるとは限らない。さらに、会話の使用言語の非母語話者が参加者に含まれる場合、話題の理解や発話の困難さという会話への参加の前提となる言語能力の違いも発生する。つまり、接触場面における三者会話とは、参加人数による相互行為の複雑性に、言語能力の問題が加わり、参加者間に不均衡な役割配分(村岡 2003)が発生するといえる。ただし、この複雑なやりとりも、無秩序に行われているのではなく、3人による会話を維持するための参加者間の役割の調整が行われていると考えられる(大場 2011)。

上記の二種類の発話(非受け手による応答, 非開始へ向けた応答)は, 前者は応答の発話を誰が行うのかという次話者選択の調整, 後者は応答の発話を誰に向けるのかという発話の方向の調整である. つまり, 話題の開始者とその受け手の間のやりとりではなく, もう1人の参加者が応答したり, もう1人の参加者へ応答を向けたりする現象を, 談話上の現象としてだけではなく, 参加者間の役割の調整が行われているという観点からとらえ直す可能性があると考える.

本研究では, 内的場面と接触場面における三者自由会話を対象に, 話題開始者とその受け手間以外の応答の発話に着目する. この三者自由会話の収録では, 特に接触場面において, 参加者の全てが, 留学生や留学生の国について話すことに対する期待を持っていました, 会話後のフォローアップ・インタビューで報告している. 参加者にとっては何を話すかが大きな関心事項であり, その何を話すかという関心は話題の開始とその応答に影響を与えたものと考えられる. 話題開始者とその受け手間以外のやりとりも, 情報交換を行うための3人の参加者の調整であると考えられる. そして, その調整は, 話題の開始者・受け手・応答者という談話上の役割だけでなく, 情報交換を円滑に行うために参加者が担う役割として捉え直すことで, より実態を明らかにできるものと考える. そこで, 本研究では, 話題開始時の非受け手による応答の発話, 話題の非開始者に向けた応答の発話の2つに着目する. そしてこの二種類の応答の発話が, 内的場面と接触場面でどのように観察され, 参加者のどのような役割の調整が行われているのか, という観点から考察を行う.

2. 先行研究

本研究では, 内的場面と接触場面における三者自由会話を分析対象とし, 話題開始に継続する二種類の応答の発話に着目し, どのような役割調整であるのか考察を行う. そこで, まず, 三者会話の参加者のやりとりに関する研究について, 次に, 参加者の役割調整に関する研究について述べる.

2.1 三者会話における参加者のやりとりの分析

三者会話を対象に, 二者会話には観察されない参加者のやりとりの特徴を記述した研究には, Kawasaki(1992), オストハイダ(2005), 熊谷・木谷(2006, 2010), 初鹿野・岩田(2008)がある. まず, Kawasaki(1992)は, 三者会話の分析から, 参加者Aが本当の意図としては参加者Bに向けた発話を, もう1人の参加者Cに向けた形で発話し, それに対して本来の受け手であるBがAに応答する「ブーメラン・スピーチ(Boomerang speech)」を指摘している.

オストハイダ(2005:39)は, 「第三者返答」という, 「話し相手の実際の言語運用能力による意思疎通の可能性」より, 「話し相手が有する言語外的条件(年齢, 人種や障害などによる外見的特徴)に対する話し手の意識」が, 話し手の言語行動に影響を及ぼす現象を指摘している. その言語外的条件が意思疎通に問題がないのにもかかわらず, 「その話し相手を無視し, 話し相手と一緒にいる第三者に返答する」としている. オストハイダ(2005)は, 日本語非母語話者と障害者に対し, 話し手が抱く意思疎通の可能性に対する想定や先入観によって, この第三者返答が起こると指摘している.

熊谷・木谷(2006, 2010)は, 調査者1名, 回答者2名による面接調査場面の分析から, 「回答者間の相互作用」を指摘している. 調査者と回答者間のやりとりが期待される面接調査場面でありながら, 回答者同士のやりとりが発生し, 最終的には調査者と回答者間で情報交換が行わ

れたことを指摘している。相互作用の種類として、同意要求・情報確認とそれへの応答、もう一人の回答へのコメントとそれに対する応答・反応、互いの発話をふまえた回答、もう一人の回答への相づち・反応が観察されたことを報告している。

初鹿野・岩田(2008)は、現話者がある参加者を次話者に選択したとき、次話者として選択されていない参加者がその次に発話する行為に着目し、順番交替システムの規則からその現象をとらえなおしている。そして、現話者が別の参加者への「ほめ」や「からかい」となる発話をもう1人の参加者に向けることで、その言及された参加者が発話することとなり、1人がやりとりの外におかれることを回避する手段として使われることを指摘している。

以上の研究は、研究の目的、対象データ、分析の方法が異なるので単純に比較はできないが、「1. 研究の目的」で言及した二種類の応答の発話の現象からみると、Kawasaki(1992)、初鹿野・岩田(2008)は「非受け手による発話」、オストハイダ(2005)は「非開始者への応答」、熊谷・木谷(2006, 2010)は両発話に類似の現象に着目していると考えられる。つまり、本研究で対象とする「非受け手による応答の発話」と「非開始者への応答の発話」は多様な三者会話に観察される現象であると考えられる。本研究では、内的場面と接触場面における自由会話を対象に両現象を記述する。

2.2 参加者の役割の分析

Fan(1994)、ファン(1999, 2006)は、会話の使用言語の母語話者と非母語話者の参加する「相手言語接触場面」の場合、母語話者が非母語話者に対してフォーリナー・トークを行うなど様々なストラテジーを用いて会話を理解しようと努めるために責任感を持つ点に注目し、参加者間に「言語ホスト」「言語ゲスト」という対となる役割関係が成立するとしている。まず、言語ホストの場合は、そのインター・アクションの使用言語が母語でもあり、そのインター・アクションにおいて「オーソリティ」となるとしている(ファン 2006:136)。そして、相手言語接触場面においては、母語話者の言語管理は「言語ホストとしての管理(host management)」であり、話題の発展をコントロールしたり、相手の発話の要約や確認を行ったりして支援をするという調整が観察されるとしている。一方、非母語話者の言語管理は「言語ゲストとしての管理(guest management)」であり、言語ホストに助けを求めたり、参加を最小限にとどめたりするなどの調整が観察されるとしている。ただし、この言語ホスト／ゲストの関係は固定的なものではなく、また、会話の管理は言語ホストのみが行うのではなく、両者の積極的な言語行動に関わっているとしている。村岡(2003:247)は、「言語ゲストと言語ホストへの役割の二分化の指摘」は、言語能力の違いから危うくなりうる「対等な参加機会」が成立しているとみなそうとする調整であるとしている。つまり、言語ホストと言語ゲストの役割とは、「参加機会の対等性を動機とする役割調整」(村岡 2003:247)であるとしている。

本研究で分析対象とする三者会話においても、接触場面の場合は言語ホスト／ゲストの役割が出現することが予測される。ただし、この言語ホスト／ゲストという二対立の役割が、3人の参加者間でどのように配分されるのかは明らかにされていない。そして、「1.研究の目的」で言及した二種類の発話(非受け手による応答、非開始へ向けた応答)の現象に着目した場合、言語ホスト／ゲストの役割調整という観点からはどのようにとらえられるのか考察を行う。

3. 調査の概要

分析対象は、知人関係3人(女性)による20分程度の自由会話である。参加者は全て関東圏の学生で、接触場面は日本人学生(J)2人と留学生(F)の1人という組み合わせである。3人の参加者は授業やサークルなどで知り合っており、会話時は既に顔見知りである。データは、内的場面(J1, J2, J3)8組、接触場面(F, J1, J2)14組の会話で、計22会話を録画・録音により収集(2004年2月～2006年1月)した。また、後日、参加者全員に対して個別にフォローアップ・インタビュー(ネウストブニー1994、以下、FUI)を行った。

接触場面のFについては、学習歴、滞日歴、母語には統制を加えず、調査時点での言語能力が中級レベルであることを条件とした。中級レベルの学習者は、日本語教育の現場では多数存在するためである。ただし、中級という枠組み自体には幅があるため、中級レベルの前半と後半(中級前半／中級後半)に分け、それぞれ7組ずつ、計14組の会話を収集した。表1、2にFの情報を示す。

表1:中級前半レベルのFの情報

会話データ	国籍	母語	年齢
中級前半1	タイ	タイ語	20代前半
中級前半2	中国	中国語	20代後半
中級前半3	デンマーク	デンマーク語	30代前半
中級前半4	カナダ	・英語(best) ・中国語(first)	10代後半
中級前半5	ドイツ	ドイツ語	20代後半
中級前半6	ブラジル	ポルトガル語	30代前半
中級前半7	アメリカ	中国語	10代前半

表2:中級後半レベルのFの情報

会話データ	国籍	母語	年齢
中級後半1	モンゴル	モンゴル語	20代前半
中級後半2	インドネシア	インドネシア語	20代前半
中級後半3	中国	中国語	20代後半
中級後半4	韓国	韓国語	30代前半
中級後半5	タイ	タイ語	20代前半
中級後半6	ロシア	ロシア語	10代後半
中級後半7	ベトナム	ベトナム語	20代後半

4. 分析

分析では、内的場面と接触場面の全22会話を話題ごとに区分し(大場2007, 2011)、話題開始の発話とそれに継続する応答の発話を特定した。話題開始の発話は、区分した話題の最初の発話である。応答の発話は、隣接応答ペア(Schegloff and Sacks 1973)の第二応答発話に限定せず、話題開始の発話に継続する、内容的に関連のある次の発話を対象とする。例えば、話題開始の発話に対し、聞き返しを行う発話、さらに詳細な情報提供を求める情報要求の発話も分析対象とする。特に、接触場面の場合、相手の発話が聞き取れなかったり、発話の意図がわからなかったりして、聞き返しや質問を行うことがある。狭義の第二応答発話のみを対象とした場合、接触場面の特徴を記述できない可能性がある。そこで、隣接応答ペアという狭い意味での「応答」の発話のみを対象とするのではなく、話題開始の発話に継続する次の発話を分析対象とする。また、二方向の情報提供による話題開始に対し、2人の受け手があいづち的な発話を行った場合、先に発話された話題開始の発話直後の1つのあいづち的な発話だけを対象とするのではなく、2人のあいづち的な発話の両方を対象とする。なお、会話例の提示の際は、話題開始の発話の方向を「→」(実線矢印)、応答の発話の方向を「--->」(点線矢印)で示し、さらに、両発話は**ゴシックの太字**で示す。

例(1)は、「非受け手による応答の発話」の例である。例(1)では、まずJ1がFに、Fが使用した「すげー」という表現に関して、「どこでそんなこと勉強した」(262)と一方向の情報要求で話題を開始する。J1の発話はFに向けられたが、J2(非受け手)がFに「先生だよね」(263)と確認し、Fは「先生私の先生」(264)とJ2の発話を繰り返す。つまり、話題の開始時の非受け手(J2)

が応答の発話をすることで、話題開始の情報要求の発話に対する情報提供が行われている。FUIにおいて、J2はこの話題について、以前、Fと話したことがあることを報告した。なお、このJ2の発話は、開始者(J1)ではなく、話題開始時の受け手(F)に向けられており、次に例をあげる「非開始者」への方向の応答の発話にも該当する。

例(1) 「すげー」をよく使うFの先生（中級前半6、話題11）

	J1	F	J2
262	どこでそんなこと勉強した		
263		先生私の先生	先生だよね
264			
265	大学の↑		
266	[へーー]		[でもー]若い
267		いつもすげー{笑}	
268			{笑}
...			

(以下、略)

次に、「非開始者に向けた応答の発話」の例をあげる。例(2)は、Fが2人のJに対して最近の忙しさについて、二方向の情報要求を行って話題を開始する(501)。これに対し、J1は「最近」(502)とFの発話の一部を繰り返すだけであるが、J2は「いそ、今週忙しいんだよね↑{笑}」(503-504)とJ1に対して確認の情報要求を行う。つまり、J2は、開始者のFではなく、J2自身と同じ受け手であったJ1(非開始者)だけに応答の発話を向けている。FUIにおいて、J2はJ1が忙しかったことを知っていたと報告した。J2は、J1の近況について知らないFに対し、J1が情報提供を行うことを期待し、応答の発話を話題の開始者のFではなく、J1に対して向けたと考えられる。このJ2の情報要求を受け、J1はFに対して「今週忙しい今週忙しかった」(504-505)と一方向の情報提供を行う。

例(2) J1は最近忙しかった(中級前半2、話題19)

	J1	F	J2
501			
502	最近	最近一忙しい一んだった↑	
503			いそ、今週忙しいんだよね↑
504	[今週忙しい]		[笑]
505	今[週忙し]かった		
506		授業多い↑	
...			

(以下、略)

図1、2は、「非受け手による応答の発話」(以下、「非受」)と「話題の非開始者に向けた応答の発話」(以下、「非開」)を示している。図1の「非受」は、話題開始時に受け手ではなかった参加者が応答の発話を行ったことを条件としており、話題開始時の受け手の応答の発話の有無は考慮しない。図2の「非開」は、開始者以外の参加者に応答の発話を向けることを条件としており、応答者が話題開始時に受け手であったかどうかは考慮しない。つまり、分析対象の2つの発話は認定の条件が異なる。結果として、例えば図1と2の2つ目の事例は同じ現象とな

るが、これらは両事例としてそれぞれで対象として扱う(例(1)).

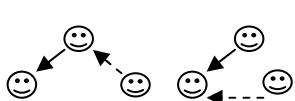


図1 非受け手による応答の発話

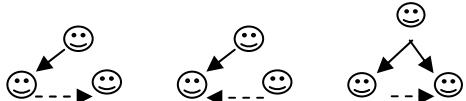


図2 非開始者へ向けた応答の発話

本研究では、以上の手続きで認定した「非受け手による応答の発話」(例(1), 図1), 「非開始者に向けた応答の発話」(例(2), 図2)に着目する。以下、4.1で非受け手による応答の発話、4.2で非開始者に向けた応答の発話について、内的場面と接触場面(中級前半／中級後半)別に特徴を述べる。

4.1 非受け手による応答の発話

「非受け手による応答の発話」(「非受」)について、話題開始の発話との関係から、(1)代理発話、(2)同類発話、(3)追加発話、(4)承認発話の4種類に分類した。以下、例をあげて説明する。

(1) 代理発話

代理発話とは、話題開始時の受け手に代わり、非受け手が応答の発話をを行う例である。多くの場合、話題開始の情報要求に対する情報提供が行われる。例(3)は、J2がJ1に対して一方向の情報要求を行ったもの、J3が代わりに応答の発話をを行う例である。まず、J2は、J1の方を向いて「え小学校も一緒だっけ↑」(423)と一方向の情報要求を行う。J2の身体の向きから、J3ではなく、J1に対する一方向の情報提供であると認定した。J1とJ3は出身が同じであり、2人はともに情報を保有している。応答の発話は、話題開始時の受け手のJ1ではなく、非受け手のJ3が「小学校は違う、高校から」(424)と情報提供を行う。受け手であったJ1は「うん」(425)とJ3の応答を承認する発話をを行う。

例(3) J1とJ3のつながり(内的場面8、話題10)

	J1	J2	J3
423		え小学校も一緒だっけ↑	
424			小学校は違う、高校から
425	うん		
426		同じクラスとか	
427			うんなつたなつた
428		そうなんだ、へー	
...			

(以下、略)

(2) 同類発話

同類発話とは、話題開始の発話とほぼ同じ内容の発話を、非受け手が、話題開始時の受け手に向ける例である。話題開始の情報要求の言い換えとなり、情報要求の連続となる場合が多い。例(4)は、J1のサークルについてJ2が情報要求を行い、J1が応答する前に、Fが「ほかは」(704)とJ1に対し、話題開始のJ2と同様の情報要求を行う例である。この話題の前後に3人はそれぞれのサークルについて情報交換を行っているため、J2もFも短い発話による情報要求である

(703, 704). ただし, J1 と J2 は各自のサークルについては既知情報であり, F のみ情報を保有していない。よって J1 の情報提供は, F に対して一方向に行われる(706-710). また, J2 の話題開始も, J1 から F に対して情報提要を行ってもらうため, J1 のサークルについて知っているなら, J1 に対して情報要求を行ったものである。

例(4) J1 のサークル(中級前半 2、話題 25)

	J1	F	J2
703			でー↑
704			{笑}
705			
706	オーケストラって、わかる↑ なんか、楽器、を一 みんなで弾くんだけどー なんかバイオリン[とかー] フルートとかー	ほかは [あー]	
707			
708			
709			
710			
...			

(以下、略)

(3) 追加発話

追加発話とは、話題開始時の受け手による応答の発話が存在し、さらに非受け手が話題開始の発話に関連する発話をいう例である。話題開始時の受け手による応答の発話に対してではなく、話題開始の発話に関連した非受け手による発話である。情報保有者の場合は冗談に対する笑い、「私も」という短い発話などで、情報非保有者の場合は話題開始の発話に関連してさらに情報要求を行う例がある。例(5)は、J2 の着ているシャツの模様について、J2 がしみであると見間違えて「しかもなんかすごい飛んでるしさ、あこれあこれとんでんの↑」(42-44)と一方向の情報要求を行うことで話題開始される。受け手の J2 は「違うよこれは」(45)と情報提供を行うが、非受け手の F も「私も一思ったー」(46)と、J1 と同様にシャツの模様をしみであると思ったと発話する。F の 46 の発話は、発話の順番としては J2 の 45 の発話に継続している。しかし、発話の内容としては、シャツの模様がしみであるという話題開始の J1 の発話に対して同じ認識であることを提示している。FUI において、F は、J2 のシャツについてどのような模様でしみに見えてしまったのかを説明してくれた。よって、話題開始に対する応答の発話と認定し、(3) 追加発話に分類した。

例(5) J2 のシャツの模様(中級前半 3、話題 2)

	F	J1	J2
42		しかもなんかすごい	
43		飛んでるしさ、あこれ	
44		あこれとんでんの↑	
45			違うよこれは
46	[私も一思ったー]	あ、[しみじやないんだ] {笑}	
47			
48		しみじやない	
49			みんなにいわれるの
...			

(以下、略)

(4) 承認発話

承認発話とは、話題開始の発話に継続するあいづち的な発話による短い発話である。接触場面のみ観察され、JがFに対して情報要求を行い、もう1人のJ(非受け手)がその情報要求が妥当な内容であるかのように承認を提示する発話が行われる。例(6)は、J2がFに対してインドネシアの地震について一方向の情報要求を行うことで話題を開始し(81-82)、Fの応答(83-91)とともに、J1も「あー」(83)とあいづち的な発話をを行う。

例(6) インドネシアの地震(中級後半2、話題5)

	J1	J2	F
81		えインドネシアも地震ー	
82		ありましたよね↑	
83	[あー]		[うんそう]2回目、え2回目
84			じゃなくてーあのねー↑
85		← /んばー/	最近ー/
86		/うんうん/	そのーにかに2日間前かな↑/
87			あたしのふるさとがね↑
88			あのかざがあ近くでー
89		[うーん]	火山が[近くでー]
90			この火山がーちょっとー、
91			なんだっけ
92		噴火↑	
...			

(以下、略)

以上、「非受」の応答の発話の種類として、(1)代理発話、(2)同類発話、(3)追加発話、(4)承認発話の例をあげた。4つの発話者の足場(footing)(Goffman 1981)を考えると、(1)と(3)、(2)と(4)の共通性が指摘できる。(1)代理発話と(3)追加発話は、応答者と同様の足場から発話を行い、何らかの情報提供がなされる。ただし、(1)代理発話は期待される発話を開始時の受け手に代わって行うのに対し、(3)追加発話は受け手の発話も存在する点で異なる。一方、(2)同類発話と(4)承認発話は、話題開始者と同様の足場から発話を行い、情報提供は行わないことを提示する。(2)と(4)どちらも、話題開始時の非受け手ではなく、受け手が情報提供を行うことを期待していると考えられる。主として、(2)同類発話が実質的な発話、(4)承認発話があいづち的な発話である。(2)同類発話は、話題開始の情報要求を言い換えるなどして、より積極的に(2)同類発話の受け手の情報提供を促す発話である。

表3は、(1)～(4)の4種類の発話について、内的場面と接触場面(中級前半／中級後半)の場面別に、「非受」の発話者の話題に対する情報保有の観点(情報保有／情報非保有)から分類した結果である。接触場面ではさらにFとJの別に分類している。

表3:場面別の4種類の「非受け手」による応答の発話の分類

場面	内的場面		中級前半				中級後半				合計
	J/F	—	—	J	F	J	F	J	F		
情報量	情報保有	情報非保有									
(1)代理発話	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
(2)同類発話	0	0	2	4	0	1	0	0	0	0	7
(3)追加発話	2	2	2	0	1	0	0	0	0	0	7
(4)承認発話	0	0	3	1	0	0	0	5	0	0	9
小計(J/F)	—	—	8	5	1	1	0	5	0	0	20
小計(情報量)	4	2	13		2		5		0		26
合計	6		15				5				26

表3より、まず、内的場面は(1)代理発話2例と(3)追加発話4例のみであり、応答者と同じ足場の発話の例のみである。次に、中級前半は(1)代理発話が1例のみではあるが、(1)～(4)の全ての例がある。また、全26例中15例が中級前半の例であり、さらに、その15例中13例がJによる発話である。最後に、(4)承認発話は接触場面のみ観察され、全てJによる発話である(中級前半4例、中級後半5例)。また、中級後半は全てこの(4)承認発話の例である。全体として、内的場面は応答者、接触場面は開始者の足場からの発話が多い。以下、各場面別に特徴を述べる。

4.1.1 内的場面における非受け手による応答の発話

内的場面は6例中、(1)代理発話が2例、(3)追加発話が4例で、全て応答者と同様の足場からの発話である。(3)追加発話の4例中2例が情報非保有の応答者による発話であり、追加発話は参加者の話題に対する情報量には関係ないものと考えられる。応答する必然性はないものの、話題開始時の受け手と同様に応答する点は(1)代理発話と共通する。しかし、(1)代理発話は、通常、情報保有者でなければできない点で異なる。以下、(1)(3)の例をあげる。

(1) 代理発話

代理発話の例は、前傾例(3)のJ1とJ3は出身小学校に関する話題(内的場面8、話題10)が該当し、もう1例もこの内的場面8の例である。この内的場面8は、3人は知人関係ではあるものの、J1とJ3は出身と現在の所属サークルが同じであり、共有する情報がJ2よりも多い。よって、J2が2人に対して情報非保有者となる話題が多く、接触場面における2人のJのように、J1とJ2が情報保有者の役割を分担し、(1)代理応答を行ったと考えられる。なお、この話題についてではないが、FUIにおいてJ1は「私が応えることではないんですけど」とJ3の代わりに、J3に関する内容の発話を行ったことに言及することがあった。

(3) 追加発話

追加発話の発話者には、情報保有(例(7))と情報非保有(例(8))の例が2つずつある。まず、例(7)では、この話題2の前の話題1において、J1が授業で見かけて不思議に思った人について情報提供を行う。この情報提供を受け、J2が「なんか耳聞こえない人の横で、やるやつあるじゃん」(23-24)とJ3に情報提供を行って話題2を開始する。受け手のJ3は「あそうかもしない」(24)とあいづち的な発話を行ったのに対し、J1(非受け手)が「あるよねのノートテイク」(26)、とJ2の情報提供(23-24)の内容の名称「ノートテイク」を明確に述べる。FUIにおいて、J2はノ

一トテイクの経験があり、J1は経験はないが用語は知っていることを報告した。J1とJ2に情報量の違いはあるが、J1は自らの保有する情報を提示し、話題開始時に非受け手であったが応答の発話をしている。

例(7) J2とノートテイク(内的場面8、話題2)

	J1	J2	J3
23		なんか耳聞こえない人の/、 横で、やるやつあるじゃん	/ (wh あーwh) /
24			あそうかもしない
25			
26	あるよねの一[ノートテイク]	[[ノートテイク]] ちょっとやつてた私	
27			
28		[[笑]] ちょっとだけ	[えー↑]
29			
30	どんなの、パソコンなの↑	ううん手書き	
31			
32			うわー
33		ずっと	
...			

(以下、略)

例(8)は、応答者が情報非保有の場合の追加発話の例である。まず、J2がJ3の方を向き、ララポートにJ3がよく行くという確認を行って話題が開始される(1)。これに対しJ3は笑いで応え、J2とJ3の2人で笑う(2)。これと同時にJ1(非受け手)も「あ行きましたー↑」(2)と情報要求をJ3に対し行う。FUIにおいて、J2(話題開始者)はJ3(受け手)がララポートによく行くことは知っていたと報告した。一方、J1(非受け手)はJ3とララポートについて知らなかっただけでなく、会話例にもあるようにララポート自体あまり行かない(7-9)ことを報告した。前掲例(7)では応答者が保有する情報を利用して応答の発話をしていたのに対し、例(8)では情報非保有者が、挿入連鎖のように情報を保有する参加者に情報要求を行うことで、結果として会話への積極的な参加も果たしている。

例(8) ララポート(内的場面5、話題1)

	J1	J2	J3
1		ララポートよく行くね↑	
2	[あ行きましたー]↑	[[笑]]	[[笑]]
3	[[笑]]	[[またララポートだよ]]	[[笑]]
4	私一		
5		ん一	
6			ん一
7	ララポートは全然		
8	行かないです近いけど		
9	/近い/		あー近いかー/
...			

(以下、略)

内的場面の(3)追加発話の例は、情報保有と非保有の両者が発話する点、話題開始時の受け手も応答の発話をを行う点が共通する(例(7)(8))。応答者は、話題に対する他の参加者との情報量の

違いを利用して発話をを行い、自らの会話への積極的な参加を提示していると考えられる。つまり、他の参加者の発話を特に促してはおらず、言語的ホスト／ゲストの役割調整ではないと考えられる。

4.1.2 中級前半における非受け手による応答の発話

中級前半は、(1)～(4)の全てに例があり、このうちJの発話が15例中13例を占める(表3)。Fの発話は、(2)同類発話と(3)追加発話に1例ずつ観察されるだけである。

(1) 代理発話

Jによる発話の1例のみである。例(9)は、J2が卓上のカップの確認をする情報要求で話題が開始される。J2が「どっち飲んでるんだっけこっちF↑」(627-628)とFに対して情報要求を行うが、J1が代わりに「うん」(629)と応答する。また、その直後にFも「うん」と発話する(630)。卓上のカップについての言及であり、Fに対する情報要求であってもJ1も応答しうる情報要求であったためであると考えられる。また、カップの所有確認のための情報要求であり、この話題はすぐに終了する(627-631)。

例(9) 卓上のカップの確認(中級前半4、話題18)

	J1	J2	F
627		どっち飲んでんだっけ	
628		こっちF↑	
629	うん		
630		暑いよ	うん
631			

(2) 同類発話

全7例中、Fが1例(前掲例(4) J1のサークル)、Jが6例で、中級前半のみに観察される。Jによる6例は、Jの話題に対する情報量の有無に関わらず、話題開始のJの発話と同等の内容を、もう1人のJが言い換えている。この言い換えにより、「非受」の応答の発話の受け手のFに情報提供を促しており、言語ホストとしての調整であると考えられる。

例(10)は、J1の所属する管弦楽団のサークルの演奏会を、Fが聴きに行った理由に関する話題である。まず、J2がFに、演奏会に行くのが好きなのかという情報要求を行って話題を開始する(850-851)。Fが応答する前に、今度は、J1がFに、管弦楽団に友人がいてチケットをもらったのか、演奏を聴くのが好きで聴きに来たのか、という選択を与えてJ2と同様にFが演奏会に来た理由について情報要求を行う(852-854)。FUIで、J1の演奏会の時点では、J1とFは知り合いでなく、J1もJ2もFの演奏会に行った理由については知らなかつたと報告した。J2の情報要求と同様の内容を、J1がさらに選択肢を与えた情報要求に言い換えており、Fによる情報提供のための発話であると考えられる。

なお、内的場面の例(8)のララポートの例も、話題開始の発話に継続し、受け手ではなかった参加者が応答の発話を、情報保有者に向ける点で同類の例であるかにみえる。しかし、例(8)では、話題開始者が「ララポートよく行くね↑」、追加応答が「あ行きましたー↑」と、当事者がララポートに行ったことだけを問うというほぼ同じ内容の情報要求である。これに対し、例(10)は、話題開始者の発話を「非受け手」の応答者が言い換えて情報要求を行っている。よ

って、F からの情報を促すための調整であり、例(8)とは異なる事例であると考えられる。

例(10) 演奏会のチケット(中級前半 2、話題 31)

	J1	F	J2
850			
851			
852	友達一いる↑管弦楽団に [ほかに]	[ん一]	好きなんだそういうの 聞くのとか↑
853			
854	でも好きできた↑		
855		はいはい、そのーあーきいぶ	
856	うん		
857		きぶ、あのーあー先生ーに	
858		もらった	
859	あ		
860			あ切符↑
861	しょ、招待状、招待状 [XXX]	[招待状]はいはいはい	
862			
...			

(以下、略)

例(11)は、1例のみ見られた F による(2)同類発話の発話の例である。例(4)(J1 のサークル、中級前半 2)と同じであるが、話題 25 より前の話題 23 から提示し、3人がサークルについて順番に話していることを示す。FUI から、J1 と J2 は、この会話において F にサークルについては聞くつもりであったことを報告した。よって、まず、話題 23 で J3 が「馬術部、入ったー↑」と情報要求を行い(668)、F と J2 が勧誘された馬術部について情報交換を行う。次に、話題 24 では F が J2 に対して「ほかの一」(695)と J2 のサークルについて情報要求を行う。J2 の情報提供の後に、話題 25 において J2 が、まだサークルについて話していない J1 に対し「でー↑」と情報要求を行い(703)、J1 が応答の発話をを行う前に、F が「ほかは」と J1 に対し、話題開始の J2 と同様の情報要求を行う。J1 と J2 はそれぞれのサークルについては既知情報であり、F のみが知らない状態である。よって、J1 の応答の発話も F に対して一方向に行われる(706-710)。

この話題 23 から 25 は互いのサークルについての情報交換であり、2人のJにとってはこの会話のために唯一準備してきた話題であった。よって、話題 25 の J2 の話題開始の発話「でー↑」(703)も、Fのために J1 に情報要求を行ったと考えられる。つまり、応答の発話の時点だけではなく、話題開始の時点において、情報交換のための言語ホストの役割調整を行っていると考えられる。また、Fの情報要求は、話題 24 で「ほかの一」(695)、話題 25 で「ほかは」(704)とほぼ同じ形式である。後者の「ほかは」では、J2 の話題開始の情報要求に連続し、前話題と同様の情報要求である。つまり、情報要求の内容は同じであっても、相手の情報提供を促すための言い換えではない。情報要求の連続という点では例(10)と類似の現象ではあるが、例(10)の J は F の情報提供を促す言語ホストとしての役割調整であるのに対し、例(11)の F は J に対する情報要求を繰り返した現象である。つまり、「非受」の発話の全てが言語ホストの役割調整であるとは限らない。

例(11) 馬術部の勧誘⇒J2 のサークル⇒J1 のサークル(中級前半 2、話題 23、24、25)

	J1	F	J2
668		[あー馬術]	馬術部、[入ったー↑]
669		いえ{笑}	
670			入ってない↑{笑}
...			

(中略)

695	ほかの一	ん↑うん
696	あのー	入った、えっとね ESS
697	/あー/	えっと英語でー/
698	/はい/	しゃべったりとかー/するー
699		に入った
700		
701	あー	
702		
703	ほかは	でー↑
704		[笑]
705		
706	オーケストラって、わかる↑	
707	なんか、楽器、をー	
708	みんなで弾くんだけどー	
709	なんかバイオリン[とかー]	[あー]
710	フルートとかー	
711		管弦
712	管弦楽団	
...		

(以下、略)

(3) 追加発話

全3例中、Fが1例、Jが2例で、内的場面と同様のやりとりであると考えられる。Fの発話は前掲例(5)のJ2のシャツの模様について「私も」と発話する例である。なお、この「私も」は、大場(2002)で、初級の学習者から積極的な会話参加へつなげるための指導項目の1つとして提案した。発話の形式としては短く、「も」も初級の文法項目で容易に発話できるためである。ただし、発話者自身の発話は増えるが、他の参加者の発話を促してはおらず、言語ホストの調整でなないと考えられる。また、この「私も」はJの発話にも観察される。

次に、Jの発話の例(12)は、FがJ2の方を向いて「あまり、ふる、くなーい↑」(1002)と「古い」という形容詞の活用をJ2に確認する情報要求で話題が開始される。FUIにおいて、以前、FとJ2は形容詞の活用について2人で練習したことを報告した。これに対し、J1(非受け手)は笑い(1003)、J2も「うんまーね{笑}」(1004)と2人ともFの活用が適切であるという情報提供を行う。J1は、思わず笑ってしまった状態であり(1003)、特にFのさらなる発話を促してはいない。なお、J1とJ2はともに日本語教育について学習しており、Fにとって形容詞の活用が難しいことを知っていた。よって、J1は否定の活用(1009)、J1は形容動詞の活用(1011)の例を指摘している。

例(12) 古いという語の活用確認(中級前半6、話題33)

	J1	F	J2
1002		あまり、ふる、くなーい↑	
1003	{笑}		
1004		→	←
1005			まーまーね{笑}
1006			うん
1007			あまり古く
1008			いえてるいえてる{笑}
1009	あんまりなになにではない		大丈夫よ{笑}、正しいよ{笑}
1010			そうそうそう
1011			きれいじゃない、とかね
...			

(以下、略)

(4) 承認発話

Jの発話のみ4例で、中級後半でも同様に5例観察される。中級前半の場合、4例中3例の応答者が情報を保有している。さらに話題開始者も情報を保有しており、1人のJが話題開始時にFに関する情報を利用して話題を開始し、Fの情報提供を促している。非受け手の応答者(J)は、あいづち的な発話を用いて情報提供を行わないことを提示し、Fの情報提供を待っていると考えられる。JのFに対する話題開始に対し、もう1人のJが話題開始の発話の内容が妥当であるように承認する構図となり、FとJの間の情報交換に対する期待を反映していると考えられる。なお、JがFに関する情報に言及する点は、三牧(1999)の6つの「話題選択のストラテジー」のうちの1つである「共通点を探索し強調する」に該当すると考えられる。三牧(1999)は日本人大学生による初対面会話の分析であるが、相手との共通点に言及して話題を開始するストラテジーを指摘している。本研究は接触場面の知人関係の会話であるが、Jは内的場面の初対面会話と同じストラテジーを使用していると考えられる。

例(13)では、J1がFに対して「ドイツってあれじゃない法律が世界一だよね」(706-707)とFの国の法律に言及して話題を開始する。Fが応答する前に、J2(非受け手)が「あー」とあいづち的な発話を用いる(708)。開始者のJ1は法経学部に所属しており、ドイツ出身のFに対し、ドイツの法律について話題にしてみたことをFUIで報告した。ただし、Fが「法律」という語彙がわからなかったため、Fからの情報提供にはつながらなかった。応答時、非受け手のJ2は、J1の情報要求に対して実質的な発話を用いておらず、Fの情報提供を期待していると考えられる。

例(13) ドイツの法律は有名(中級前半 5、話題 26)

	J1	F	J2
706	ドイツってあれじゃない		
707	法律が世界一だよね		
708			あー
709	法律	ほーうりつー	
710			
711	ロウロウ		
712			うん
713		法律 law	
714			
715	そうそうそう		うん
...			

(以下、略)

例(14)は、4例中1例の応答者が情報非保有の例で、次節の中級後半の5例と同じ例である。まず、J1が中国の野菜の食べ方についてFに情報要求を行って話題を開始する(144-145)。Fが応答で情報提供を行う前に、J2が「あー」(146)とあいづち的発話をを行う(147)。J2はFUIにおいて、会話の前半はFに対して食べ物のことなど色々聞いていたことを報告した。つまり、前掲例(13)のようにあえて既知情報を利用して話題開始を行うものではない。J2のあいづち的発話(146)だけでなく、150-154においても2人のJによるあいづち的発話が連続しており、Fからの情報提供を待っていると考えられる。あいづち的発話は情報提供を行わないこと、他の参加者に情報提供を行うことを期待することを提示しうる。接触場面ではJがこの(4)承認発話を行っており、Fに情報提供を促す言語ホストとしての役割調整であると考えられる。

例(14) 中国と日本の物価の違い(中級前半 2、話題 8)

	J1	F	J2
144	ちゅ中国一ではーどういう		
145	野菜をいっぱい食べる↑		
146			あー
147		あーそう、あのー野菜ー	
148		あなすはーとてもー	
149		安ーいーからー	
150	んー		
151			あー
152	そなーんだ	はい	
153			
154	[そっかそっか]	中国の一肉とかー野菜ー	[へー↑]
155		んーやす安いー	
156			
157	安いー[あー]		[んー]
158			そなーんだ
...			

(以下、略)

以上、中級前半の(1)~(4)の例について述べた。(1)(3)は内的場面と共通する現象であるのに対し、(2)と(4)はFからの情報提供を促す言語ホストの役割調整であると考えられる点を指摘した。

4.1.3 中級後半における非受け手による応答の発話

中級後半は(4)承認発話のみ5例で、全てJによる発話である(表3)。また、1例のみFが話題を開始しているが、残りの4例はJがFに向けた一方向の話題開始である。つまり、Fの情報提供を期待する話題開始であり、これに継続する非受け手の応答もFからの情報提供を期待していると考えられる。

(4) 承認発話

Jによる話題開始の4例をみると、まず、情報非保有者のJが情報保有者のFに向けて話題を開始する。そして、もう1人のJがその話題開始の発話に対し、(4)承認発話をあいづち的な発話で行う。これにより、Jは情報提供を行わないことを提示し、情報保有者のFによる情報提供を促すこととなる。前掲例(6)のインドネシアの地震について情報要求を行って話題が開始された例が該当する。中級前半の最後にあげた例(14)(中国と日本の物価の違い)と同様のやりとりである。ただし、中級前半の例(14)はFの情報提供を待って2人のJによるあいづち的な発話が連続していたのに対し、中級後半の例(6)ではFがJの期待通りに国の地震について情報提供を行っている点で異なる。

次に、Fによる話題開始の例みると、情報非保有のFが情報保有のJに対して話題を開始する点では、話題開始時点ではFとJが担う情報上の役割が他の4例とは逆転する。しかし、もう1人のJ(非受け手)があいづち的な発話を行う点は共通する。つまり、話題開始者はFとJで異なるが、情報保有者に情報提供を期待し、非受け手があいづち的な発話によって、自らは情報提供を行わないことを提示するのは、他の4例と同様にJである。

例(15)はFがJ1に茶髪ではない理由について情報要求することで話題を開始する(171-177)。FUIにおいて、Fは自分がインドネシア出身であるため、例(6)のように地震について聞かれることが多く、ここでは話題を変えてみたことを報告した。J2もJ1が髪を染めない理由については知らなかつたとFUIで報告し、J1の情報提供(179-180)の前に、「ん——」(178)とあいづち的な発話をを行っている。

例(15) J1と染髪(中級後半2、話題8)

	J1	J2	F
171			え↑ところで、日本人はねー
172			なんか最近ほんとに
173			あなんかすごい茶髪してー
174	/うん/		J2ちゃん/みたいなみたい
175	/んー/		とかー/えどうしてあのー
176			J1さんは、あの
177			茶髪してないの↑
178	ん——		
179	私高校/時代の時に		
180	1回してたんだよ[笑]		
181		[えーそうなんだー]	[え———]ほんとー
182			えーな何色↑
183	茶髪だった		
184	[笑]	[笑]	[笑]
185	1回だけ、1回だけ		

中級後半の例は全て、「非受」の応答者があいづち的な発話により情報を保有していないこ

とを提示し、情報保有者の情報提供を促す点で共通する。例(15)を除き、話題保持者は F である。中級前半も F の情報提供を促す点で共通するが、4 例中 3 例の J は、F に関して持つ情報を話題開始時に利用する点で異なる(例(13))。F に情報提供を行ってもらうため、中級前半は話題開始と応答の両発話において言語的ホストとしての役割調整を行うのに対し、中級後半では応答の発話時ののみの調整であると考えられる。

4.2 非開始者に向けた応答の発話

本節では「話題の非開始者に向けた応答の発話」(「非開」)について、4.1 の「非受」の分類と同様に、話題開始の発話との関係と参加者の話題に対する情報量から分類を行う。具体的には、(1)当事者、(2)話題保持者、(3)その他の 3 種類である。(1)当事者は話題の当事者に発話を向ける例で、(2)話題保持者は話題に関するもう 1 人の情報を持つ参加者に発話を向ける例である。なお、(3)その他は、上記(1)(2)の分類に該当しなかった 2 例で、中級前半 1 例、中級後半 1 例である。

まず、(1)当事者と(2)話題保持者の例を合わせて提示する。内的場面ではこの 2 種類の例が 1 例ずつある。例(16)では、まず、J2 が J3 に情報要求を行い、J3 だけでなく J1 も応答の発話をを行う。この J1 の発話は、話題開始者の J2 に対してではなく、ララポートに行った当事者である J3 に対して「あ行きましたー↑」と情報要求を行う。つまり、(1)当事者に発話を向ける例である。

次に、話題 2 では、J1 が「ララポートってそんなおっつきくないですよね↑」(41-42)と J2 と J3 に向けた二方向の情報要求で話題を開始する。ララポートについて、J1 は、話題 1 においてあまり行かないと述べている(7-9)。J1 は情報非保有であるが、J2 と J3 は情報保有である。これに対し、J2 は「え↑まじで↑」(43)と開始者の J1 に驚きを提示するあいづち的な発話を向けるが、J3 は「{笑}{あれでかいほうだよね}」(44)と J2(非開始者)に同意を求める応答の発話を向ける。ララポートに対する意見が参加者間で異なることが話題開始の発話(41-42)で判明し、J3 は同じ意見の参加者 J2 に対して応答の発話を向いたと考えられる。つまり、ララポートについてよく知っている J2 に向けた、(2)話題保持者の例である。

例(16) J3 とララポート⇒ララポートはさほど大きくない(内的場面 5、話題 1、2)

	J1	J2	J3
1		ララポートよく行くね↑	
2	[あ行きましたー]↑	[〔笑〕]	[〔笑〕]
3	[〔笑〕]	[またララポートだよ]	[〔笑〕]
4	私ー		
5		んー	
6			んー
7	ララポートは全然		
8	行かないです近いけど		
9	/近い/		あー近いかー/

(中略)

38		ん1回しかいったことないXXXX	時間つぶしに
39			あー[笑]
40			
41	ララポートってでもそんな	え↑まじで↑	
42	おつきくないですよね↑		{笑}[あれでかいほうだよね]
43			
44			
45	いや、あれ、で、でも	/あ/	[あー]
46	あれ、いちんちで回りきれ	[あそつか]	
47	ますよたぶん/	[そ、そういう世界か]	
48	[うまくいけば]		[うーん]
49	でーなんかけっこう		ま、そうだよね↑{笑}
50	おつきいとこだとー		
51	いちんちじゃやっぱ		
52	[回りきれない]		
53			
54	うーん		
55			
...			

(以下、略)

表4は、(1)～(3)の3種類の発話について、内的場面と接触場面(中級前半／中級後半)の場面別に、「非開」の発話者に対する情報保有の観点(情報保有／情報非保有)から分類した結果である。表4より、まず、当事者の例が、全25例中18例を占め、このうち中級前半のJによる発話が半数の9例を占める。次に、接触場面の23例(中級前半18例、中級後半5例)のうち、Jの発話が18例(中級前半13例、中級後半5例)を占める。4.1の「非受け手」による応答の発話と同様に、中級前半の例が多く、接触場面全体でもJによる発話が多い点が指摘できる。

表4 場面別の「非開始者」へ向けた応答の発話の分類

場面	内的場面		中級前半				中級後半				合計
	J/F	—	—	J	F	J	F	J	F	J	
情報量	情報保有	情報非保有									
(1)当事者	0	1	3	6	4	1	0	3	0	0	18
(2)話題保持者	1	0	2	1	0	0	1	0	0	0	5
(3)その他	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2
小計(J/F)	—	—	6	7	4	1	1	4	0	0	23
小計(情報量)	1	1	13		5		5		0		25
合計		2	18				5				25

4.2.1 内的場面における非開始者に向けた応答の発話

内的場面の2例の発話者の話題に対する情報量は、前述の通り、(1)当事者が1例、(2)話題保持者が1例(前掲例(16))のみである。

(1)当事者と(2)話題保持者

前掲例(16)では、J2とJ3は、ララポート自体だけでなく、J3がララポートによく行くことについても知っているのに対し、J1は情報非保有である。つまり、J2とJ3がチームを組んで(中

井 2006)情報提供を行っていると考えられる。FUIにおいて、J1は、話題2において2人と意見が異なったため、自分の意図を説明しようと一生懸命であったことを報告した。(1)当事者、(2)話題保持者とともに、参加者が互いの情報保有量を認識しており、その情報量を反映し、話題の開始者ではなく、「非開」の方向へ発話を向ける点では共通する。また、どちらも「非開」の発話の受け手の参加者の情報提供にはつながってはおらず、言語ホストの調整ではないと考えられる。

4.2.2 中級前半における非開始者に向けた応答の発話

中級前半は、(1)当事者が14例(F:5例, J:9例)、(2)話題保持者が3例(J:3例)、(3)その他が1例(J:1例)である。全18例中、Jの発話が13例を占める。

(1) 当事者

(1)当事者は、話題開始の時点において、応答の発話が明らかに「非開」の方向となることが予測される例が4例ある。

例(17)は、J2がJ1に対して、Fがオーストラリアに住んでいたことがあるという情報提供を行うことで話題を開始する(626-627)。この会話は、J2がFの国ブラジルに1年滞在していたこともあり、J2がFやFの国に関してJ1より情報を持っている。J1はJ2の情報提供を受け、話題の当事者であるFに「へーー↑住んでた、んですかいいなー」(628-629)と「非開」の応答の発話を向ける。以下、話題非保持者のJ1と当事者のFの2人のやりとりとなる(628-637)。ここでは、話題開始でJ2が参加者の1人であるFについての情報を話題開始に利用し、情報非保有のJ1に対して発話を向ける。応答の発話は、非開始者で話題の当事者であるFに向かう点、話題の当事者Fが情報提供を期待される点が、話題開始の発話より十分に予測される。J2が情報保有者であり、もう1人のJ(情報非保持者)とF(当事者)の間を取り持つように話題を開始しており、Fの情報提供を促す調整であると考えられる。他の3例についても、同様のやりとりであった。

例(17)Fは豪州に住んでいた(中級前半6、話題24)

	J1	F	J2
626			
627			
628	へーー↑住んでた/、んですか	→/うん/	オーストラリアにもいたこと あるからね
629	いいなー		
630			
631	3年も↑あそれで英語が	3年	
632		はい	
633	しゃべれるのか		
634			うん
635	いいなオーストラリアの		
636	どのへんですか↑		
637		あーし Sydney	
...			

(以下、略)

次に、例(17)ほど話題開始時に応答の発話の方向は予測可能ではないが、同じ(1)当事者の例

をあげる。例(18)は、F が 2 人の J に対して最近の忙しさについて情報要求を行って話題を開始する(501)。J1 は「最近」(502)とあいづち的な発話をを行うが、J2 は「いそ、今週忙しいんだよね↑ {笑}」(503-503)と J1(非開始者)に対して確認の情報要求を行う。この結果、当時者の J1 が F に対して情報提供を行う(504-511)。なお、J2 は「3 時間しか寝てないんだよ」(512)とさらに J1 に言及して F に情報提供を行う。これは、前傾例(17)「F は豪州に住んでいた」で、J2 が F の情報に言及する発話と同様の現象である。例(17)は話題開始の発話、本例(18)は応答の発話において当事者に関する情報に言及している。どちらも、もう 1 人の情報非保有者に対し、当事者の情報提供を行うための調整である点、F と J の間の情報提供となる点は共通する。

例(18) J1 は最近忙しかった(中級前半 2、話題 19)

	J1	F	J2
501		最近一忙しい一んだった↑	
502	最近		
503			いそ、今週忙しいんだよね↑
504	[今週忙しい]		{笑}]
505	今[週忙しかった		
506		授業多い↑	
507	授業一は、ま一いつもある	/あー/	
508	から一大丈夫なんだけどー		3 時間しか寝てないんだよ
509	その授業の宿題↑/が		寝る
510	なんか 2 つか 3 つくらいあって		3 時間、だけ
511	あんまり寝る時間がない{笑}		
512			[笑}]
513			
514			
515			
516			
517	[昨日は]、2 時半に寝て一		
...			

(以下、略)

(2) 話題保持者

次に、(2)話題保持者の 3 例は全て J による発話で、応答の発話後の情報提供を 2 人の J が協力して F に対して行うため、情報を保有する応答者がもう 1 人の情報保有者 J(非開始者)に発話を向ける点で共通する。

例(19)は、カレーの専門店の場所について F が情報要求を行って話題が開始される(883)。まず、J1 が「早稲田通りの一」(884)と応答の発話をを行うが、途中で J2(非開始者)に「あれどこだろうね↑」(885)と情報要求を行う。さらに、「なんかクイックリーとか、の近くだよね↑」(887-888)と J2 に継続して情報の確認を行い、J2 が応えながら説明を始める(889-894)。FUI において、2 人の J は、カレー屋の場所はわかるものの、その場所の説明が難しかったことを報告した。よって 2 人で相談しながら情報提供を行い(熊谷・木谷 2006, 2010)、最終的には 2 人の相談による情報提供が F の最初の情報要求に応える形で収束する。発話上は J 同士で実質的なやりとりがなされていても、2 人の J は F に対する情報提供を行っているという意識であると考えられる。また、2 人の J の参加により、不確かな情報の確認をしつつ F に情報提供を行うことが可能となる。さらに、不確かな情報の確認を 2 人で行うということは、談話上、話し手

と聞き手のやりとりとなり、会話の展開も維持されることとなる。結果として、情報提供者としての役割の負担、言語ホストとして会話を維持する負担が軽減されると考えられる。

例(19) カレー屋の場所(中級前半3、話題22)

	F	J1	J2
883	どこどこ↑		
884		早稲田通りの一 あれどこだろうね↑	
885			スパイシースプーン
886		なんかクイックリーとか、 の近くだよね↑	
887			早稲田通り通らないから一
888		[あんまりー]	[馬場駅]の近く
889			馬場駅と、明治通りの 真ん中ぐらい
890			明治通り
891	んー		
892			行ったことない
893			
894			
895	行ったことない		
896			
897	[[笑]]	[最近]	
898	[[笑]]	[ほんとに最近できたよね↑]	
899	...		どっちも↑うん、そうそう

(以下、略)

(3) その他

最後に、(3)他の例は、Jによる発話の1例である。例(20)は、J2が同じカナダ短期留学経験者のJ1に対してカナダ昼食の経験について情報提供を行うことで話題を開始する(46-47)。J1は、「ひどかったようちの弁当」(47)とカナダでの経験について、F(非開始者)に対して情報提供の応答の発話を向ける。この中級前半4の会話では、Fがカナダ出身であるため、2人のJは、この話題に限らず、2人の留学経験を話題にすることが多かった。Fは2人のJの留学先の国出身であり、(2)当時者の例に近い例である。ただし、留学自体は2人のJが当事者である点、応答者自身が話題保持者として情報提供を行っている点から、(3)その他に分類した。

例(20) カナダの弁当(中級前半4、話題2)

	J1	J2	F
46			/うん/
47	ひどかったよ[うちの弁当]	カナダの一/やつはーねー [カップラーメンとかねー]【笑】	/うん/
48	うちのなんか一袋にー/		/うん/
49	普通のビニール袋にー/		/うん/
50	カップラーメンでしょー		
51	でなんか[りーんごとかー]/	/【笑】/	
52	{そういうの入れられてー}【笑】		
53	...		あーあーあー

(以下、略)

4.2.3 中級後半における非開始者に向けた応答の発話

中級後半は、(1)当事者が3例、(2)話題保持者が1例、(3)その他が1例で、全てJによる発話である。

(1) 当事者

例(21)は、Fが2人のJに対し、J1の酒の強さについて冗談のようにと情報提供を行うことで話題を開始する(81-82)。これに対し、J2が「{絶対強いですよね↑}」(83)と話題の当事者のJ1(非開始者)に対して笑いながら同意を求める情報要求を行う。この前後では互いのアルコールに対する強さを冗談で言い合っている。J1からの情報提供はなされなかつたが、3人で笑つた後(84)、J2が自らについて情報提供を行う(87、90-91)。

例(21) 酒の強さ(中級後半 3、話題 3)F 開始

	J1	J2	F
81			J1さんはー、お酒一強い {かもしれない、ですよね}
82			
83		[絶対強いですよね↑] [[笑]]	
84	[[笑]]		
85			[[笑]]
86			そうですねー[笑]
87		私もけっこう自信ありますけど	んー
88			んー
89		{笑}	
90		なんか部活やってると	
91		飲み会系とか多いんで	
92			
93	んー		あー
...			

(以下、略)

例(22)は、J2が偕楽園の梅の状況について二方向の情報提供で話題を開始する(964-965)。これに対し、Fは「あー」(965)とあいづち的な発話をを行うが、J1はF(非開始者)に対し「あ、見に行ったんだよね↑」(966)と確認の情報要求を行う。例(21)(22)は話題の開始者にFとJという違いはある。しかし、「非開」の応答の発話が話題の当事者に向けられている点、その発話が当事者に対する情報の同意や確認を求める点は共通する。つまり、情報保有者に話題に関する情報提供を促す調整であると考えられる。例(21)は冗談のように3人で笑つてしまつて当事者から情報提供はなされなかつたが、例(22)は当事者のFから梅に関する情報提供が行われる(966-976)。

例(22) F と偕楽園(中級後半 7、話題 25)J 開始

	J1	J2	F
964		でも梅ももう、咲いてるし	
965		【梅一】	【あー】
966	あ、見に行ったん【だよね】↑		【[あ見に]】行った
967		[[え↑どこに]]	【んですけど】
968		行ったんですけど↑	
969			水戸
970	[水戸]	[へー↑]偕楽園ですか↑	
971		いいなー	あー偕楽園に
972		[[早かった↑]]	
973			でも、あんまり[まだ]
974			咲いてなかった
975		[[何%]]くらい咲いてました↑	【[んですよね】
976		[[20%↑]]	うーん 20[%[くらい]かな】
...			

(以下、略)

(2) 話題保持者

次に、(2)話題保持者では、F の二方向の情報要求による話題の開始に対し、2人のJが協力して情報提供を行っており(熊谷・木谷 2006)、中級前半と同様のやりとりである。

例(23)は、Fが日本の大学院進学率について2人のJ2に対して情報要求を行うことで話題が開始される(612-616)。J1は「でもねー」(617)といいかけるが、J2は「文系と理系で違うとかありますよねー」(618-619)とJ1(非開始者)に対して確認の情報要求を行う。つまり、話題開始のFに対して直接応答するのではなく、日本の大学についてFよりは情報を保有していると考えられるJ1に発話を向ける。自らの情報の確認を行いつつ、Fの情報要求に応じようとしていると考えられる。なお、Fは修士の学生であるが、2人のJは学部生である。FUIより、Jは2人とも進学の予定もなく、特にJ1は卒業後すぐ働きたいと考えていることを報告した。Fよりは日本の大学について情報を保有しているかもしれないが、詳細には応答できないため、2人で協力して情報提供を行おうとしたと考えられる。J2の情報要求に対し、J1は「あるあるある」(620)と応答し、621以降、継続して情報提供をFに対して行う。

例(23) 日本の大学院の進学率(中級後半1、話題18)

	J1	F	J2
612		日本一日本では一なんか 大学院に一進学する人は一、 だいたいどのぐらいですか↑	
613		ひとつはクラスの中一 クラスの中から一	
614			
615			
616			
617	でもね一		
618			文系と理系で違うとか ありますよね一
619			
620	あるあるある		
621	ただ一なんか一日本の		
622	文系で一大学院に行く		
623	日本人って/	/うん/	
624	なんかものすごく勉強が		
625	したくていく人と一/なんか	/うん/	
626	[しょうがなく]行く人とかが/	/あー/	
627	将来がね/決まらなくて一		
628	もう少し考えたいみたいな		/あー/
629	で一/とりあえずで行く人も	/ふーん/	
630	いるから一ね↑		
631	ちょっと違うかもしれない		
632		あー	
633			うーん
...			

(以下、略)

(3) その他

(3) その他は1例のみで、「非開」の発話により、話題展開の途中で発生した問題が結果的に解決した例である。まず、Fが2人のJの趣味について情報要求することで話題を開始する(577)。これに対し、J1は「趣味なーんだろー」と自問自答するような発話を(578)、「あります↑」とJ2(非開始者)にFと同じ情報要求を行う(579)。これに対し、J2が「えー喫茶店めぐり↑」と答え(580)、以下、その趣味について説明を始める。FUIにおいて、J1は、読書などいわゆる趣味らしいものがとっさには思い浮かばず、J2に同じ質問を「ふってみた」ことを報告した。Fの情報要求に応えようとしたJ1が、自らは情報保有者としての役割が果たせないものと考え、もう1人のJ2に発話を向けたと考えられる。(2)話題保持者に近い例だが、例(23)のように、J1がJ2を情報保有者として認識していたとは断定しにくいため、(3)その他と分類した。

一方、J2は、この話題に限らず、Fの情報要求による話題転換の唐突さを会話中ずっと留意していたとFUIで報告した。そして、それまでその唐突さのためにあまり話せなかつたものの、この趣味についての話題では、ようやく自分のペースで話すことができたと報告した。J1が最初に応答者として発話をすることで、J2にとって唐突さが緩和されたと考えられる。FUIから、同じ会話に参加していても、2人のJがそれぞれ留意した問題は異なっていたことが判明したといえる。しかし、三者会話であることにより、2人のJが各自で留意していた問題が結果的には2つとも解決している。この問題の解決により、会話への肯定的評価にもつながったものと考えられる。

例(24) J2 の趣味(中級後半 6、話題 18)

	J1	J2	F
577	趣味なーんだろー		なんか趣味、あるー↑
578	あります↑		
579	あります↑	えー喫茶店めぐり↑ 〔笑〕	
580		喫茶店	〔巡り↑〕巡りっていうのは↑
581	あー[楽しいねー]	[色んな喫茶店行くのー]	
582		そうそうそう	あー喫茶店めぐり
583	[ツアーミたいなの]	新しいお店を発見したりとかー	
584			
585		それがー好きかなー	
586			
587			あー
588			
...			

(以下、略)

5. 考察

本研究では、内的場面と接触場面の三者会話における、「話題開始時の非受け手による応答の発話」、「話題の非開始者に向けた応答の発話」の2つに着目し、話題開始の発話との関係から分類を行った。この二種類の応答の発話の特徴について内的場面と接触場面別にまとめ、言語ホストの役割の調整の観点から考察を行う。

5.1 非受け手による応答の発話における言語ホストの役割の調整

内的場面と接触場面における非受け手による4種類の応答の発話の特徴についてまとめる。まず、内的場面は、応答者と同じ足場から発話する(1)代理発話(3)追加発話の例のみである(表3)。応答者は自らも情報提供を行うことがあるが、話題開始時に受け手であった情報保有者の更なる情報提供を促してはいない点で共通する(例(3)(7)(8))。

次に、中級前半は4種類の全ての例が観察され(表3)、応答者と開始者の両方の足場から発話をしているかに見える。しかし、(1)代理発話の1例、(3)追加発話の3例中2例はJによる発話である。Jは内的場面と類似の発話であり、またFによる発話も相手の情報提供を促してはおらず、言語ホストとしての役割の調整ではないと考えられる(例(9)(12))。つまり、内的場面と同様の調整であると考えられる。一方、(2)同類発話は、7例中6例がJによる発話、(4)承認発話は4例全てJによる発話である(例(10)(11)(13)(14))。(2)同類発話のFによる発話の1例は、話題開始の時点でJによる言語ホストとしての調整が行われ、Fは別の話題の発話と同じ形式を繰り返しているに過ぎない点、前の話題から次に話題保持者となるべき参加者が明確である点を述べた(例(11))。つまり、1例は話題開始の発話、他の例は全てJの「非開」の応答の発話によってFの情報提供を促す調整を行っており、全て言語ホストとしての役割調整であると考えられる。

最後に、中級後半は、5例全てがJによる(4)承認発話である(表3)。中級前半と同様に、Fからの情報提供を促しており、言語ホストとしての役割の調整であると考えられる。ただし、中級後半のFは応答の発話後に継続してJの期待する情報提供を行っている(例(15))。よって、(4)承認発話の例はあっても、(2)同類発話のように実質的な発話でFの情報提供を促す例はなかつ

たものと考えられる。中級前半との言語能力の違いが、Jの応答の発話時の言語ホストの調整にも影響したと考えられる。

5.2 非開始者に向けた応答の発話における言語ホストの役割調整

内的場面と接触場面における非開始者に向けた3種類の応答の発話の特徴についてまとめる。まず、(1)当事者は、参加者の1人が話題の内容の当事者であり、当事者についての話題であることが話題開始時において明らかとなり、応答の発話が話題開始者ではなく、その話題の当事者に向かう現象である(例(16))。接触場面の場合、当事者はFとJの両方の例が観察された。JがFに情報提供を行うか、Fの情報提供をJが促している(例(17)(18)(21)(22))。よって、三者会話でありながら、表面上はFとJの二者間のようなやりとりとなる。中級前半と中級後半では、集計結果に差があった(表4)。FとJの間の情報交換を遂行するため、中級前半のほうがJによる言語ホストの調整がより多く行われたものと考えられる。

次に、(2)話題保持者では、話題開始時において参加者間の情報保有量の違いが明らかとなり、情報提供を情報保有者から非保有者に対して行ってもらうため、応答の発話が情報保有者(非開始者)に向かう現象である(例(16))。接触場面では、応答の発話に継続して、2人の情報保有者のJが協力してFに情報提供を行う点も共通する(例(19)(23))。内的場面と接触場面の違いを見ると、まず、内的場面は、(1)(2)ともに、話題の内容に対する参加者の情報量により、可変的な2名と1名の組み合わせである。これに対し、接触場面では、FとJとのやりとりとなり、三者会話でありながら表面上はFとJの二者間のやりとりのようにみえる。

最後に、(3)その他は2例と少なく、いずれも(1)(2)の類似の現象であると考えられる例である(例(20)(24))。情報交換を遂行するための調整である点は、(1)(2)と共通する。つまり、3種類の「非開」の方向の応答の発話により、情報保有者が情報提供を行うべき参加者に対して情報提供を行うこととなる。接触場面ではFとJの間の情報交換となっている点、特に中級前半のJの発話が多い点からも、情報交換を円滑に行うための言語ホストとしての役割調整であると考えられる。

6. 結論

本研究では、内的場面と接触場面の三者自由会話の話題の開始者と受け手間以外の参加者間で行われた応答の発話(非受け手による応答の発話、非開始者へ向けた応答の発話)に着目し、話題開始の発話と参加者の情報量の関係から分類を行い、言語ホストの役割調整という観点から考察を行った。以上の分析から、次の4点が指摘できる。

まず、内的場面と接触場面の共通点として、2種類の発話とも全体としての値は少ない点が指摘できる。分析対象の応答の発話は、二者会話には観察されない多人数会話の特徴ではある。しかし、三者会話であっても基本的には話題開始者と応答者間の発話が多く、二者会話と同様のやりとりが多いものと考えられる。ただし、本研究では、話題開始に対する応答の発話のみを分析対象としており、その後の話題展開における情報交換では、さらに同類の発話が観察されると考えられる。

2点目に、接触場面では、特に中級前半で2種類の応答の発話が増加しており、Jによる発話が多かった。3人の参加者の中で、言語能力の問題のある参加者Fが、実は最も情報を提供することが期待される参加者である。また、大場(2007, 2011)の話題開始の発話の分析から、接

触場面では F と J の間の話題開始が多く、中級前半では F に対する一方向の情報要求の増加が観察された。これより、F が応答者として情報提供を行う機会が増加することとなる。2 種類の発話は、期待される F と J の情報交換を円滑に行うための応答時の J による言語ホストの調整であると考えられる。よって、接触場面では J の発話が多く、その中でも中級前半の J の発話が多くを占めると考えられる。

3 点目に、2 種類の応答の発話者は、情報保有者と非保有者の両者の例があり、同じ応答の発話であっても、参加者の情報上の役割の調整では説明が十分には行えず(大場 2011)、言語ホストの役割調整として考察した。内的場面にも同様の発話例が観察されるが、参加者の発話の動機が接触場面とは異なると考えられる。内的場面では、話題に対する参加者の情報量の違いから 2 種類の応答の発話が行われ、3 人の組み合わせは参加者の情報量により可変的である。一方、接触場面では、FUI からも F と J の間の情報交換の期待が参加者間あり、実際、F と J の間の情報交換が 2 種類の応答の発話後に行われる例が多かった。2 種類の応答の発話は、F と J の間の情報交換を動機として行われる言語ホストの役割調整であると考えられる。

4 点目に、二者会話では J が全ての役割を 1 人で調整するのに対し、三者会話では 2 人の J で役割を担うことができ、負担が軽減されうることが指摘できる。2 種類の応答の発話自体は内的場面にも共通する現象が観察されるため、J には許容される調整であると考えられる。つまり、接触場面の J から F に対する発話の調整は、知人関係の三者自由会話において、情報交換を行うための調整のバリエーションの 1 つであると考えられる。ただし、接触場面では、F と J の間で 2 種類の応答の発話が増加するため、F と J という表面上の社会的役割がより顕在化しやすいと考えられる。

本研究の分析における中級前半の J による値の高さは、応答の発話の時点でも、F の情報提供を促す調整が J により行われていることを示している。従来、数多く行われる傾向にあった接触場面の初対面二者会話の分析では、話題開始の発話に着目した研究が多く、F に対する質問などによる言語ホストの調整が指摘されてきている。しかし、本研究の分析から、話題開始の発話だけでなく、応答の発話においても、情報交換を期待した調整が行われていることを指摘した。また、この調整は、三者会話の分析によって二者会話とは異なる参加者間のやりとりを記述することで、どのような役割の調整であるのかを考察することが可能となったと考える。

なお、Fan(1994)、ファン(1999, 2006)は、言語ホストと言語ゲストについて、固定的な役割関係であるとは述べていない。本研究では、話題開始と応答の発話を分析対象とし、さらにその応答の発話において、参加者の話題に対する情報量の違いでは説明できない発話の現象に焦点を当てたことから、J の言語ホストの役割調整という結果となっている。つまり、決して、言語ホストは J によって調整される固定的な役割であると主張しているのではなく、他の 2 つの役割(大場 2011)では説明できない現象に焦点を当てた結果が、J による言語ホストの役割調整であったということである。本研究では話題開始と応答の発話を分析対象としているが、今後は話題展開部におけるやりとりも分析対象とすることが課題として指摘できる。これにより、J と F という社会的な役割とは必ずしも一致しない、動的な言語ホストと言語ゲストの役割調整が明らかになるものと考える。二者会話とは異なる多人数会話の局所的な現象は注目されているが、その現象を役割という観点から考察した点に本研究の特徴がある。今後、役割の観点から多人数会話の現象をとらえる研究を積み上げていきたいと考える。さらに、本研究結果の教育現場への応用を考えた場合、多人数会話であることで参加者の役割調整の負担の軽減を利用

し、接触場面に不慣れな日本人学部生と留学生の合同授業を計画することが考えられる(大場2008)。研究を積み上げていくと同時に、筆者の教育現場への応用を考察し、さらに個人の現場を越えて他の現場でも活用する可能性も考察したいと考える。

文字化の規則

[]	同時発話
[[]]	同時発話のうち、重ねた方の発話
//	ターンを取得しない発話
/	ターンを取得しない発話が発話された位置
{笑}	笑い
{ }	笑いながらの発話
↑	上昇イントネーション
数字	沈黙の秒数
、	ごく短いポーズ
()	咳などの非言語行動

参考文献

- Fan, S.K. (1994). Contact situations and language management. *Multilingua* 13-3, pp. 237-252
- Goffman, E. (1981). *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 初鹿野阿れ,岩田夏穂 (2008). 選ばれていない参加者が発話するとき—もう一人の参加者について言及すること— 社会言語科学 10-2 pp.121-134 社会言語科学会
- Kawasaki, A. (1992). Boomerang speech in Japanese 武内道子他(編) ことばのモザイク : 奥田夏子 名誉教授古希記念論文集 pp.173-186 目白言語学会
- 熊谷智子,木谷直之 (2006). 三者面接調査における回答者間の相互作用—同性の友人同士の場合— 日本語科学 20 p.47-65 国立国語研究所
- 熊谷智子,木谷直之(2010). 三者面接調査におけるコミュニケーション—相互行為と参加の枠組み みくろしお出版
- 三牧陽子 (1999). 初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析— 日本語教育 103 pp.49-58 日本語教育学会
- 村岡英裕 (2003). アクテビティと学習者の参加—接触場面にもとづく日本語教育アプローチのために— 宮崎里司, ヘレン・マリオット(編) 接触場面と日本語教育 ネウストプニーのインパクト pp.245-259 明治書院
- 中井陽子 (2006). 会話のフロアにおける言語的／非言語的な参加態度の示し方—初対面の母語話者／非母語話者による 4 者間の会話の分析 早稲田大学日本語教育研究センター講座日本語教育 42 分冊 pp. 25-41 早稲田大学語学教育研究所
- ネウストプニー, J.V. (1994). 日本研究の方法論—データ収集の段階— 待兼山論叢 28 日本語学篇 pp.1-24 大阪大学
- 大場美和子 (2002). 初級文法で磨く会話のテクニック「そうですか.」のコミュニケーション 月刊日本語 10 月号 pp.78-81 アルク
- 大場美和子 (2007). 三者間グループ会話場面における話題の開始—接触場面と母語場面における知人関係の会話の分析— 村岡英裕(編) 接触場面と言語管理の学際的研究—接触場面の言語管理研究— vol.5 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 154 pp.37-52 千葉大学大学院人文社会科学研究科

- 大場美和子 (2008). 接触場面における問題の対応能力の育成をめざして—日本人学部生に対する映像を利用した授業実践の分析— WEB 版 日本語教育 実践研究フォーラム報告 pp.1-17 日本語教育学会
(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/nkg/kenkyu/Forumhoukoku/kk-Forumhoukoku.html#2008>)
- 大場美和子 (2011). 内的場面と接触場面における三者自由会話への参加の調整—談話・情報・言語ホストの役割の分析— 千葉大学審査学位論文
- オストハイダ, テーヤ(2005). “聞いたのはこちらなのに…” —外国人と身体障害者に対する「第三者返答」をめぐって— 社会言語科学 7(2) pp.39-49 社会言語科学会
- Schegloff, E., and Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 7(4), pp.289-327.